

# 漱石の招宴欠席をめぐる

槌田満文

明治四十年六月に催された西園寺公望首相の文士招宴に、夏目漱石が欠席した事実は「時鳥ときどり 剛半ごうはんばに出かねたり」の句とともに知られている。漱石の不参については、いくつかの理由が考えられるが、主として新聞史的視点からこの問題をとりあげてみたい。

西園寺侯爵（号・陶庵、大正八年に公爵）の文士招待会は、のちに「雨声会」（注しと名づけられたが、第一回招宴のニュースは、明治四十年六月十四日の『読売新聞』に「首相の小説家招待」の見出しで、次のように報ぜられている。前年の十一月から『読売』の主筆となった竹越与三郎（号・三又）は、この招宴を企画した西園寺のブレインであり、当時の『読売』は第一次西園寺内閣の機関紙的性格が濃厚であった。

「文学に興味を有し居れる西園寺首相は豫て知名の文学者と会して一日の清談を希望し居れるも未だ其の時機を得る能はずして過ぎたるが頃来小閑を得て来十七、八、九の三日間に分ち左記の小説家二十名を其の私邸に招待して文学の雅会を催ふす可しと云ふ首相が豫ての希望は広く批評家其他の文学者をも招待する筈なりしが官邸にては打集うちあつきて談じ難く私邸は一時に多人数を容るゝ能はざ

るを以て今回は単に小説家のみに止めたる由にて批評家諸氏及び此外の小説家は更に機を得て招待する由なり

小杉天外 小栗風葉 塚原波柿園 坪内逍遙 森鷗外 幸田露伴  
内田不知庵 広津柳浪 巖谷小波 夏目漱石 大村桂月 後藤宙外 泉鏡花 柳川春葉 徳田秋声 島崎藤村 国木田独步 田山花袋 川上眉山 二葉亭四迷

以上の人選は竹越が社員の近松（徳田）秋江にプランを作らせて決めたものという。（注）招かれるか否かは小説家としての社会的評価にかかわるとみられただけに、文壇の内外に大きな波紋を投げた。なかでも大町桂月（記事の「大村」は誤植）だけは小説家としての実績がなく、会合における桂月の言動もとかく物議の種となっている。（注）二十人のうち、欠席したのは漱石のほか逍遙、二葉亭の計三人であった。

漱石の辞退については、翌十五日の『東京朝日新聞』が「首相の文士招待と漱石氏の虞美人草」という見出しで、次のように報じている。東京帝国大学、第一高等学校の教職を辞して、同年三月十五日に朝日新聞社に入社したばかりの漱石は、新聞小説の第一作「虞

美人草」(同年六月二十三日から連載)を、六月四日から書き始めていたところであった。

「曩に俳優を招待して嬉しがらせたる陶庵侯は、この這回更に現今知名の小説家二十名を私邸に招く事となれり、既に世人に豫期されたる事として、主客対談の状など早くも揣摩するものもある可し、吾社の漱石氏の許にて一覽したる招待状の全文は左の如し

拜啓益御安泰奉慶賀候。昨唐突我国小説に関する御高話拝聴。秀粗飯差上度候間御閑暇に候はゞ来十七日午後五時半頃駿河台拙宅迄御枉駕被下度御許諾に於而は至幸に存候右御案内迄如此に候頓首

六月十一日

侯爵 西園寺公望

何某 殿

追て日本間に於て食事の積りに御座候間御平服の儘御出被下度候。諸否御回答を乞ふ。

右に就き漱石氏が往訪の記者に語れる処によれば目下一切の来客を謝絶して熱心執筆中なる小説虞美人草の根に培かひ葉に灌ぐに苦辛甚しく、此卯の花垣を出づる一刻なれば我責を空しうする亦一刻の感ありとて遂に遺憾ながら侯爵へ宛て辞退の返簡を出せりといふ、其書簡は豫て陶庵侯が俳句の造詣深きを識れるを以て、左の一句を以て是を結べりとぞ、

杜鵑ほととぎすなかにば出かねたり 漱石しゆせき (注4)

「ほととぎす」の句については(A)首相招宴に対する揶揄や皮肉を含むとる説、(B)欠礼の挨拶に代えた贈答句にすぎないとみる説の二つがある。(注5)これは招宴辞退の理由として次のどれに重きを置くかとも無関係ではない。漱石がなぜ招宴に欠席したかについては、少くとも四つの理由があげられる。

(一) 政府や官僚の權威主義に対して批判的だった漱石のモラル・バックボーンによるのではないか。

(二) 招待された文士たちのなかに、同席したくない人物がいたのではないか。

(三) 初めての新聞小説を執筆中という事情など、身辺きわめて多事だったからではないか。

(四) 読売新聞社からの入社要請を断わって、朝日の社員になっただけの漱石は、読売が深くかかわっていた招宴に出るのをいさぎよしとしなかったのではないか。

以上のうち、(一)の理由については、明治四十四年二月から四月にかけての文学博士辞退問題をめぐる漱石の態度、同年五月の文芸委員会制度に反対意見を発表した姿勢などに通じると見ることも可能であろう。(注6)ただし、『漱石全集』を総索引で調べてみると、西園寺個人に対する批判的な言辞は見当たらない。

(二)については、事前にうわさされていたとはいへ、その人選の詳細を招待状が届いた時に知らなかったはずの漱石の場合、この理由は憶測にすぎるとはならない。文名とみに高まっていた時期ではあるが、明治三十八年から小説を発表しはじめた漱石は、招待されたメンバーのなかでもっとも新顔の文壇人だったことに留意しなければならぬ。のちの博士問題で考えられるように、後塵を拝する結果になるといったおそれにはなかつたはずである。

(三)の理由は、辞退の書簡にも記されているだけにもっとも直接的・具体的で、説得力を持つといつてよい。執筆経験のない新聞小説の第一作「虞美人草」にとりかかった六月四日の翌日には、長男純一が出生している。来客との面会を謝絶しただけでなく、この

ころの漱石は肝癪が起きると「妻君と下女の頭を正宗の名刀でスバリと斬ってやり度い」（六月二十一日付け鈴木三重吉あて書簡）ともらすような精神状態にあった。文士招待会に出かけてゆくような心境ではなかったにちがいない。

しかし、六月の招宴に対する返礼として、文士たちが西園寺侯を芝公園の紅葉館に招いた同年十月十八日の会合（この時にはじめて「雨声会」と命名された）にも、またその下相談の会合にも、漱石は「無拠處差支有之」（八月四日付け書簡）「生憎差支にて」（十月九日付け書簡）と出席を断わっている。「虞美人草」を脱稿し、九月二十九日に本郷区西片町十番地から牛込区早稲田南町七番地に転居した直後で、胃病に苦しんではいしたが、十月十八日の当日特に用事があったわけではなかった。大正五年四月十八日の雨声会まで、西園寺を囲む会合は計七回に及んだが、漱石は一度も出席していない。多忙だけが欠席理由ではなかったとみるべきであろう。

最初の招宴に欠席した三人のうち、逍遙は明治四十年六月十八日の『毎日電報』で「都合さへよくば行く積だったが、生憎平塚へ旅行しなければならぬのでお断りした」といっている。二葉亭の方は友人内田不知庵にあてた同年十月末と推定される手紙で「首相の招待に応せざりしはいやであったから也 このいやといふ声は小生の存在を打てへ響く声也 小生へ是非を知らず可かかを知らず 只これか小生の本来の面目なるを知る而已」と書いている。（一）の理由に近く、その徹底ぶりは漱石以上といえるかもしれない。

明治三十七年三月から大阪朝日新聞社東京出張員となっていた二葉亭にとって、読売との問題は全く顧慮する必要がなかった。しかし読売入社を断わって朝日に籍を置いたばかりの漱石の場合は、読

売幹部が肝入りした首相招宴に出席したくない（四）の理由が全く作用しなかったとはいえないであろう。

『読売新聞八十年史』（昭和三十年刊）によれば、明治三十九年十一月に、政友会代議士の竹越三又が足立荒人（号・北鷗）に代わって主筆に迎えられたのは、本野盛享社長の長男で駐露公使だった本野一郎が西園寺や竹越ときわめて親しく、本野公使から当時経営的にも窮地に陥っていた社運の挽回に協力を依頼されたためという。『八十年史』には「西園寺内閣の機関紙のようになった読売新聞へ西園寺側の代表を送る必要もあり、かつ本野社長は足立主筆の方針にあきたらず何とか窮状を打開したい気持もあったので、ここに竹越を主筆に迎え、足立を主幹兼理事として営業方面を担当させることになった」とある。

主筆となった竹越は、みずから毎日のように社説を執筆するとともに、かつて『文学新聞』とうたわれた時代の再現をはかった。瀧田樗蔭を通じて漱石に入社を勧めたのもそのためであろう。竹越の主筆就任を報じた十一月二十日の社告には、「文壇の新星」漱石から「特別寄書家」となることの約諾を得たと記されているが、漱石に読売入社の意志がなかったことは、十一月十六日付けの樗蔭あて書簡に次の記述があるので明らかといえる。

「読売新聞は基礎の堅い新聞かも知れぬが大学程堅くはない。（略）大学の俸給は読売よりも比較的固定して居る。竹越氏は政客である。読売新聞と終始する人ではなからう。（略）読売には読売に付属した在来の記者も居る。僕が文欄を担任すれば僕の近しい人の文字のみ載せて、在来の人の文字を閑却する様になるかも知れん。さうすれば苦情が起る。其他色々の事で苦情が持ち上がる。も

し僕の待遇をよくして月給を増して僕の進退を誘ふとすれば僕も少しは動くかも知れん。然し未来の危険は依然として元の通りであるのみならず比較的僕が過分の月給をとれば社中に又不平が起る。島村抱月氏の日々文壇と同様の事情が起るに極つてゐる。(略)」

漱石の眼には、読売の経営事情、竹越の「雇われ主筆」的性格、社内抗争の危険性などがはつきり見えていた。漱石の拒絶が竹越個人に対する不信感を主因と考えるのはいささか酷といふべきであろう。明治三十八年十月から『東京日日新聞』の「月曜文壇」を主宰した抱月が、社内事情からこの年の十月つまり前月にやめたケースは、漱石にとって記憶に新しい「前車の轍」といえた。

当時の読売社内で竹越が足立に足を引っぱられていた状況を、社員だった上司小剣は「『U新聞年代記』(昭和八年作)で記録している。「竹越の在社は極く僅かの間であったが、社中の空気を爽かにした。(略)『どうも元老(足立のこと)が承知しないんで。……』と、新しい発案を足立に阻止され、悄然としてゐたこともあった。何かの理由で、新聞を一日休むことにして、社中に触れ出した後、これも足立の反対で立ち消えになった時など、気の毒であった。」

同じく社員だった正宗白鳥も、竹越と漱石について『文壇人物評論』(昭和七年刊)の「夏目漱石論」で、次のように記している。「当時の読売新聞の主筆であった竹越三又氏は、漱石招聘を企てて、自分で交渉に出掛けたやうであったが、私も一度主筆の命を奉じて駒込の邸宅に漱石を訪問した。(略)『草枕』を発表して名声噴々たる時であったのに関はらず、得意の色は見えなかった。『竹越さんが先日訪ねて来たが、僕を先生と云つてゐた。しかし、竹越さんの方が僕よりも年上ぢやないだらうか』『小説を書きだしてから、

丸善の借金は済した」と、興もなげに云つたことだけは、今もなほ覚えてゐる。(略)竹越氏は私に向つて、『漱石は、読売入社については不安を感じてゐるらしいが、社では約束は確実に守る。本野一郎君に僕からさう云つて、将来の地位の安全は保証する』と云つたが、さういふ言葉をそのままに受入れるべく漱石は、あまりに聡明であつた。」

読売より出おくれたにもかかわらず、朝日が漱石の獲得に成功したのは、小宮豊隆著『夏目漱石』(昭和十三年刊)などによれば『東京朝日』の主筆池辺吉太郎(号・三山)の人物に漱石が惚れ込んだこと、また朝日が漱石を満足させ得る破格の待遇で迎え入れたことによる。しかし朝日社内にも問題がないわけではなかつた。漱石入社に対する大阪本社と東京支社との考え方の食い違いが、下手をすれば破談に終わる危険性をはらんでいたのである。

漱石招聘を最初に決意したのは『大阪朝日』の主筆鳥居赫雄(号・素川)で、大阪本社では漱石の関西赴任を前提としていた。それでは漱石をくどけないことを知って、結局東西の両朝日に漱石の小説を同時掲載するという、異例の条件で妥協点を見出し、漱石もそのために原稿を書きためたのは池辺の力によるものであつた。その間の事情を、高木健夫著『新聞小説史』明治篇(昭和四十九年刊)は「もし『大朝』に入社して京阪に転任せよ、というような社長の申し出を聞いたら、漱石は一儀に及ばずに断つたであらう。三山は鋭いジャーナリストの勘でちゃんとのみこみ、大阪本社の意向を独断でタナ上げしての肚芸であつた」と指摘している。

そうしたいきさつであつてみれば、第一作を執筆中に、ライバルの読売が関与している首相招宴へ出席することが、朝日社内におけ

る池辺の立場を苦しくすると漱石は感じたのではないか。また、竹越の懇望を拒否しながら、西園寺の招待に応じることは、漱石のモラル・バックボーンが許さなかつたことも考えられるのである。

いづれにしても、竹越は漱石の招聘に失敗したばかりでなく、明治四十年六月十七日の首相招宴にも漱石を出席させることができなかった。一方『朝日』の紙面では同月二十三日から「虞美人草」の連載が始まって大きな反響を呼んだ。竹越が読売を退社し、代わって足立が主筆に返り咲いたのは同月二十七日のことである。

漱石の与り知らぬところとはいえ、ハイカラ紳士<sup>グ</sup>として知られた竹越が足立との社内抗争にいやげがさしてやめたといわれることと、漱石の去就が全く無関係だったとはいえないであらう。そして、漱石が首相招宴を断わつた理由のなかに、新入社員としての社内事情、特に『東京朝日』主筆の池辺に対する配慮もあつたのではないかと考えられる。

総合してみれば、(一)の理由はほとんど考えられず、直接的には(三)がもっとも強い。それに(四)が加わつたのではないか。そして潜在するもっとも本質的な理由は(一)だったとみるべきであらう。「時鳥……」の句も、(A)の意を内に包んだ(B)の句と考へたい。

〔付記〕 本稿執筆にあたって古川久氏の御教示と、和田利夫氏の「文芸の保護と統制」779(けいろく通信「昭和五十五年九月十一日」)の記述に負うところが大きかつた。記して感謝の意を表したい。

(注1) 明治四十年十月十八日に紅葉館で催された文士たちの首相に対する返礼会の席上、六月の第一回招宴での寄書の帳名を幸田露伴が乞われて「雨声」と記し、広津柳浪らによって「雨声会」と名づけられた。(十月十九日

付け「読売」『朝日』)ただし竹越与三郎著『陶庵公——西園寺公望公伝』(叢文閣、昭和五年刊)や後藤宙外著『明治文壇回顧録』(岡倉書房、昭和十一年刊)などに、六月の第一回招宴で命名されたところのため、伊藤整著『日本文壇史』第十一卷(講談社、昭和四十六年刊)などがその誤りを踏襲しているのは、和田利夫氏の指摘する通りである。

〔雨声会〕はその後、明治四十一年五月二十七日(釜地・瓢屋)、四十二年六月十六日(浜町・常盤屋)、四十三年十一月二十五日(常盤屋)、四十四年十一月十七日(常盤屋)、大正五年四月十八日(常盤屋)に開催された。返礼会を含めて七回を数えたわけだが、以上の事情もあって「第×回雨声会」といった書き方は新聞・雑誌によって一定していない。

(注2) 最初の人選について、世間では西園寺に近い竹越と国木田独歩によるものとうわさしたが、事実は近松(徳田)秋江が竹越に提出した甲乙二案に基づくものであつた。秋江の「文壇無駄話」雨声会を評す『新潮』明治四十四年二月号)によると、秋江のプランにあつた徳富蘆花、上田敏、島村抱月の三人が消え、大町桂月、塚原波柿園の二人が加えられていたという。変更されたいきさつは明らかでない。

招待側として、竹越と政友会代議士の横井時雄(小楠)の長男、元同志社校長が宴席の幹旋役をつとめた。西園寺に文士招待を考えつけたそもそのものきっかけは、明治三十四年十一月から二カ月ほど西園寺邸に寄食していた独歩のすすめによるものだったという。小泉策太郎筆記、木村毅編『西園寺公望自伝』講談社、昭和二十四年刊)。「雨声会(文士招待)の催しは、あゝ仰山に評判されたが、国木田がすゝめたのがもです。後になつて、竹越と横井が世話をした」とある。しかし人選には独歩は全くタッチしていない。

(注3) 明治四十年六月十七日付け『万朝報』の投稿欄「文界短信」に「西園寺首相が十七、八、九の三日を以て逍遙鷗外氏を始め小説家廿名を招待して文学談を聴くといふのは頗る称すべき美拳であるが、其廿名が皆小説家として知られて居る人であるのに、たゞ一人大町桂月氏が混ざつて居る。(漱石藤村氏はまあ兎も角として) ハテ桂月は何といふ小説を書いたか知らん(新文士)」とある。

それをうけて同月二十二日付け「文界短信」に次の投書が載つた。「西

園寺首相の文十招待に就いて其人選の内幕を言へば、政友会の伊藤代議士が書肆隆文館の編輯局に到り、草村北星以下同編輯局員に人選を頼んで、それが其儘採用されたのだ、大町桂月が加はったのも、最初江見水蔭としたのを消して桂月と書き交へた爲だ(分壇小僧)「これは水蔭の『自己中心明治文壇史』(昭和二年刊)に引用されているが、事実無根であったことは明らかで、当時いかに文壇内外でデマが乱れ飛んだかの一証といつてよい。(注4) この記事は『大阪朝日』では同日付けで次のように掲載された。見出しは「首相と漱石」で、傍線の部分に語句または表記の異同がある。

「曩に俳優を請待して嬉しがらせたる陶庵侯は今更に……知名の小説家……を私邸に招く事となれり既に世人に豫期されたる事として酒間会談の態など早くも抽擧する者……あるべし本社夏目漱石の許に達したる請待状の全文は左の如し

拜啓益御安泰奉慶賀候取唐突我が国小説に關する御高話拝聴勞煩敝差上度候間御閑暇に候は、来る十七日午後五時半頃駿河台拙宅迄御枉駕被下度御許諾に於ては至幸に存候右御案内迄如此に候頓首

六月十一日

侯爵 西園寺公望

、、、、殿

追而日本間に於て食事の都合に御座候間御平服の儘御出被下度候

諸否御回答を請ふ

右に就き漱石は……「且下一切の來客を謝絶して……執筆中なる小説(眞美人草の根に培ひ花に水瀧ぐに苦心甚だしく此の卯の花壇を出る一刻なれば我が實を空しうする亦一刻の感あり」とて遂に遺憾ながら侯爵へ宛て辞退の返翰を出せり……其の書簡は豫て陶庵侯が俳句の造詣深きを知るを以て左の一句を以て之を結び……

時鳥剛半ばに出兼ねたり……」

……は省略部分、——は語句あるいは表記の異同、……の部分文章の改変を示す。東京と大阪で同日に掲載されたところから「東京電話」の欄ではないが、電話送稿されたと考えられる。特に「主客」が「酒間」、「葉」が「花」など、発音が近似した語句の異同からみてその可能性が大きい。また「漱石氏」を「漱石」とし、漱石書簡を引用したらしい部分に『を

入れた点など、大阪の本社意識の表われとみるべきではなからうか。(注5) 寺田寅彦、松根豊次郎(東洋城)、小宮豊隆著「漱石俳句研究」(岩波書店、大正十四年刊)の合評では、東洋城の「此句は一方に世間並に愚劣な事一方に権勢に媚びる事の閑笑すべき事を戯談の様に言つてのけた所に大皮肉があると思ふ」、寅彦の「僕は矢張皮肉を感じる。そして其処から嫌味を感じる」という発言がA説で、豊隆だけは「是は寧ろ先生の社交的な江戸っ子が軽く出でゐる挨拶の句」とするB説をとっている。

(注6) 明治四十四年二月二十日、文部省から勅令による文学博士号授与の通知が一方的にきたのに始まる博士問題で、漱石は一貫して辞退のままだと主張する姿勢を崩さず、四月まで文部省と折衝のすえ物別れのまま終わった。「博士問題の成行」(『東京朝日』同年四月十五日)に「余は博士制度を破壊しなければならんと迄は考へない。然し博士でなければ学者でない様に、世間を思はせる程博士に価値を賦与したならば、学問は少数の博士の専有物となつて、僅かな学者的貴族が、学権を掌握し尽すに至ると共に、選に洩れたる他は全く一般から閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の続出せん事を余は切に憂ふるものである。余は此意味に於て仏蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ。従つて余の博士を辞退したのは徹頭徹尾主義の問題である」とあるのによつて、漱石の真意は明らかである。同年五月十七日に公布された文芸委員制度に対しても「文芸委員は何をするか」(『東京朝日』同年五月十八日、二十日)で「もし文芸院がより多く卑近なる目的を以て、文芸の産出家に対して、個々別々の便宜を、其作物上の評価に依じて、零細にかつ随時に与へようとするならば、余は其効果の比較的少きに反して、其弊害の思つたよりも大いなる事を断言するに憚らぬものである」と反対意見を述べている。

竹越は「陶庵公」(前出)で「公は人に対してこの会合は単に文人と會して閑談するを楽しむだけであるといつてをうったが、前年、勅命による三條実萬の伝記を尾崎紅葉に書かせんとしたとき、これを機会として民間の文学を宮中に入れたいと思つてをうったことに照し合すれば、この事も偶然の催しでなかつたことが想像せられた」と書いている。この記述が事実とすれば、首相招宴のねらいは所詮漱石の立場からは本質的に容認しがたいものがあつたとみるべきであらう。